

現役教師ですが “教育”について こんなことを考えてます。 —これからの教育を担う人たちへ— (最終回)



受験生にとって聞けそうで、なかなか聞く機会がないのが現役教師の教育観。
毎月1つのテーマを取り上げ、先生方の考えを聞いてみました！

今月のテーマ：「自分を変える力」を伸ばす

自分がどのような人間かを知ることは、面接での質問はもちろん、その後の教員人生でも役に立ちます。本田先生は自分について知ること、自分を変える力につなげていったようです。

著 本田 将貴

北海道札幌市出身。平成24年小学校教諭になる。現在、千葉県八千代市立八千代台東小学校教諭。

自分とはどのような人間なのか？

「あなたはどのような人間ですか？」

学生時代、教員採用試験対策で受けた模擬面接でこう聞かれ、はっきりと答えられず、悔しい思いをしたことを今でも覚えています。同時に、その時から「自分とはどのような人間なのだろう？」と、いつも考えるようになっていました。

私は、北海道札幌市で生まれ育ちました。小学生の頃から運動が好きで、中学校から始めた野球は大学まで続けました。また、人前に立つことも嫌いではなかったので、中学3年生の時には、体育祭で応援団長を務めたり、得意な歌を活かして、音楽集会でサンタルチアのソロパートを担当したこともありました。振り返ってみると、かなり自己肯定感の高い中学生だったと思います。教師になりたいという夢をもち始めたのは、様々な分野に興味を持って挑戦する自分を肯定的に捉えて応援して下さった、この時の担任の先生の影響でした。地元の公立高校に入学してからは、全道大会を目標に3年間野球に全力を注ぎ、その後は、小学校の教員免許を取得できる地元の私立大学へ進学しました。

この楽しさと感動を、子供たちにも伝えたい

やりたいと思ったことには何でも取り組み、納得がいくまでやり遂げてきた私にとって、「自分とは」という、答えの出ない問いにぶつかったのはこの時が初めてでした。そんな中、大学の就職対策講座で自己分析というものを知りました。私は、自分の長所や短所、好きなことや苦手なことなどを、1冊のノートにまとめることにしました。少年時代の記憶から、「なぜ教師になりたいのか？」「教師になってどんなことを子供たちに教えたいのか？」という当時の自分の心境まで、思いついた時に、自分に関する色々なことを書き留めるようになりました。

そのようなことを続けているうちに、ある変化に気が付きました。それは、授業や友達の話で、「自分」に置き換えて聞くようになった、ということです。「自分だったらどう考えるだろう？」という感想をもちながら、他者の話を聞いているうちに、少しずつ「自分なり」の物事の捉え方や考え方を自覚できるようになりました。そうして、冒頭にお話した、模擬面接の答えも得ることができたのです。

私にとって「自分」について考えることは、物事の

視野を広げ、「考える」楽しさに気づかせてくれるものでした。「この楽しさと感動を、子供たちにも伝えたい」。そう思った私は、改めて、教師になりたいという意思を固めました。

大学で学んできた知識が通用しない

そのような経験を経て、無事、夢だった小学校の先生になった私は、教師としての人生を歩み始めました。しかし、5年生の担任を任された1年目は、悪戦苦闘の日々でした。「こういう発問をすれば授業は上手いく」、「こういう指導をすれば子供は言うことを聞く」という、大学で学んできた知識がほとんど通用せず、段々と、子供たちとの心の距離が離れていってしまったのです。今思い返すと、子供たち一人ひとりの気持ちを受け止めることなく、自分の信じる正しさを押し付け、自分だけで学級をつくり上げようとしていたのだと思います。

そんな時に、6年生の担任をされていた先生方の学級を覗く機会がありました。「5年生でこれほど大変なのだから、6年生はもっと大変なのだろう」と考えていた私の目に映ったのは、自分の学級には見られない、子供たちの明るく元気な笑顔と、優しく朗らかな雰囲気でした。私は、心の底から「羨ましい」と思いました。またそれと同時に、「自分もこんな学級がつくりたい！でも、どうすればよいのだろうか？」と、本気で悩むようになりました。それからというもの、先輩方に指導方法を伺うだけでなく、時には、先輩の言動をそのまま真似して、褒めたり叱ったりしてみたり、学級のルールを先輩のやっているようにつくり変えてみたり……と、色々なことを試みました。

そのような試行錯誤の日々を経て、1年目の悔しさをもって臨んだ2年目、ほんの少し自信をもって臨めた3年目、1年目の自分を乗り越えようとした2度目の5年生……。気付けば、毎年毎年、色々な思いをもって学級担任を務めるのが当たり前になって

いました。本当に辛くて、教師を辞めたいくなる時もありましたが、数々の成功や失敗の末、なんとか9年目まで続けているのが今の私です。

そして、また一つのこと気が付きました。それは、「変化は急には起こらない」ということです。毎年、年度初めに掲げた目標や理想を実現しようと、ガムシャラに実践し、悩み、考え続けた日々の積み重ねが、少しずつ「自分」という人間を変えていってくれていたのです。つまり、私にとって、「自分」を変える力とは、「できない、わからない」と言える勇気と「もっと成長したい！」という気持ちをもって、日々努力を積み重ねることだったのです。

「自分を変える力」を伸ばす

私が教員の大先輩から聞いた言葉に、『『わかった』、『できた』は過去。“疑問”が未来をつくる』というものがあります。この言葉との出会いは、私にとって非常に大きいものでした。「自分」という人間について考えた大学時代。その「自分」という人間は、自身の弱さを受け入れて、日々努力することによって変えられるのだ、と気付いた教師9年目。そして今、「その力を伸ばすために必要なものは何か？」という問いが、未来の「自分」をつくるためのキーワードとなっている気がしています。

今、教師として、目の前の子供たちを幸せにするために、私に必要なことはまだまだ沢山あります。だからこそ、常に今の自分に課題をもち、理想の「自分」を追い求めることが、未来を担う子供たちを育てるに値する教師になるための方法なのだと思います。

みなさんは、「自分とはどのような人間か」という問いに答えられますか？もし、答えに悩むのであれば、今が自分を変えるチャンスです。より良い教師になるための「自分を変える力」。その力を伸ばすために、いつまでも自分に対して疑問をもち続けられる人間でありたい、と私は思います。

今月のまとめ

- 「自分」について考えることで、視野が広がり、「考える」楽しさに気づいた。
- 毎年度悩み、考え続けた日々の積み重ねが、少しずつ「自分」という人間を変えていってくれた。